
IS ～インフィニット・ストラトス～ “最強” の機関 ‘ IS 風紀委員会 ’

トリィケンスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）“最強”の機関「IS風紀委員会」

【Nコード】

N9230W

【作者名】

トリイケンスケ

【あらすじ】

「我々IS風紀委員会が業務を執行する」

そんな決め台詞とともに現れる、最強の国際機関。

委員長と副委員長は転生者兼大会社の社長兼宇宙大国の国王兼国家代表。

そんな常識を踏みにじる彼らが、IS学園に入学！！

他の転生者もいる中、彼らはどうするのか！？

この作品は、作者の妄想、主人公最高、ご都合主義、等が含まれま

す。

第一話

始まりはいつも突然に?? (前書き)

はじめましてトリィです。

第一話 始まりはいつも突然に??

————?? (主人公) 視点————

どうも、こんにちは。
じんりゅうじせいや
神龍侍閃夜です。

今回僕はインフィニット・ストラトスの世界に行くことになりました。

その時の事をどうぞ。

————十数分後————

「そんな訳でスイマセンでした!!!!」

おっと!もつと後だ。

————さらに数分前————

「スイマセンでした!!!!」

えっ?白い服着た羽生えてる女の人(かなり美人)が日本人の最終奥義土下座をしていた。

「なあ、零夜、なんでこんな事になってんの??」

横にいた親友の神火鳥しんかどり零夜れいやに聞いてみる。

「……………さあ？」

この親友の、神火鳥 零夜は声が小さい。
まあ、そんなにでもないけどね。

でも、良い事は言うし、真剣な時や切れた時は大声を出したりする。
けっっこう、いい奴だ。

「それは私たちのせいなんですよ」

ん？この人の事忘れてた。

「私は神です。人の人生を管理しています」

へ……………。

「部下たちが書類整理をしていた時、コーヒーをいつせいにこぼしてしまい、その人たちが乗った飛行機がハイジャックされて、死ぬ予定になってしまったのです」

へ……………、ふむふむ。

「そこにたまたま乗っていた貴方達が犯人に飛び掛ったおかげで、死んだのはその後撃たれた貴方達以外にはいません」

そうか、よかった。

「そんな訳でスイマセンでした！！！！」

別に良いけど。。。。。

「そこで、あなたたちを転生させることになりました。願い事は助けた人の数です」

い
い
い
ん
つ
て
!!
!!

「て、てんせい！？！？！？！？！？」

見ろよ、表情の変化が少ない零夜までもが目を見開いてるぜ。

「そうです、願い事はたくさんを助けたので、230個です」

ぶっ！！そんなに！！！！

「まあ異例中の異例ですね」

そういえばこの前、設定だけ考えてそのままの物語があったな。

「俺の家の俺の部屋にある机の右側、上から3番目の一番上にあるノート取って」

「はい、……これでですか？」

おお、そうそう。

「そうだよん」

いやー覚えておいてよかった。

「では後229個です」

じゃあ、後は。

「この設定どつりにして。ああ、神龍侍は俺、神火鳥はこいつな。それと、その能力を完全に制御できるようにして」

「はい、分かりました。でもこれって、この世界の一番強い人の50倍強いですし、一番頭良い人の40倍ぐらい頭良いですけど、いいんですか？」

うーん、どうしょ??

「いいかな? 零夜」

困ったときは零夜に相談すれば何とかなる。気がする。

「……良いんじゃない?」

そうか。ならいいや。

「良いつてさ」

「では、いつてらっしゃいませ」

「「はい」」

閃夜・零夜が言った後

「もう少しおまけしますか・・・」

次回は

設定です！たぶん！！

乞うご期待。

設定・・・では無く。第二話 宇宙の王子、天災に会う。前編（前書き）

すいません。設定とか言って置きながら、第二話です。

どうぞ。

設定……では無く。第二話 宇宙の王子、天災に会う。前編

――神龍侍視点――

「H I M A D A」

この発言の主はこの俺、神龍侍 閃夜だ。

まあ、自分で考えた設定だから、分かってはいたけど、スゴイね。

一度見たら忘れようと思わない限り覚えてるし。

ISの基礎理論とかもう知ってるし。

本気で走ると、ソニックブーム出さずに、音速超えるし（どうやってんだか、分からないけど）。

あ！そうそう。俺の居る所だけどさ、宇宙に在る月を拠点とした、超大国。

宇宙国家“アヴァロン”

なんだよね。

このアヴァロンは宇宙に在るにもかかわらず、地球にもかなりの影響力を持っていて、さらに国営の会社“アヴァロンホーム”は色々な製品を作っており、キャッチコピーは“歯ブラシからミサイルま

で、365日24時間懇切丁寧安心安全の商品をアヴァロンホーム”である。

このキャッチコピーから分かるように様々な製品を作っており、国内シェアは全てが90%超、さらに地球でも75%超というんだか気持ち悪いぐらいの売り上げを上げており、そのせいもあってかアヴァロンは歳入が歳出を大きく上回り、国の金庫はすごい事になっている。

ちなみに“アヴァロン”の国王は同時に“アヴァロンホーム”の社長になっている。

そして今の国王は俺の父親、俺一人っ子、もう分かりきってると思うけど次の国王&社長は俺だ。

ちなみに神火鳥は宰相の家に生まれており、俺の幼馴染だ。

“アヴァロン”の宰相は“アヴァロンホーム”の副社長だ、神火鳥も一人っ子、もう分かるよね？

さらに俺らいま10歳だよ。

設定のおかげでかなり気持ち悪いけど。

‘神童’とか‘鬼才’とか‘もはや神’とか‘いや悪魔だろ’とかってオイ！！悪魔はないだろ！！酷いぞ！！！！

まあ何に対しても完璧にできるとか、すごいよね。まあ自分のことだけ。

でも俺は武道が得意（得意とかそう言うレベルじゃないけどboy作者）だし、神火鳥は機会に強い（何度も言うようだが、‘強い’とかそう言うレベルじゃないboy作者）けどね。

そんな訳で、やりたい事はかなりやったからな、ヒマなんですよ。

ISの兵器はひそかに建造してるし、俺の部隊“IS風紀委員会”はすぐ作れるように手配してるし、あ、そうそう、“IS風紀委員会”は女ばかりだと思うでしょ！違うんだな〜これが。

なんと！！俺と神火鳥が頑張って作った、フル・スキン全身装甲のISによく似てるけどISを使い方によっては圧倒する超兵器“モビルスーツ”つまり“MS”だああああ！！！！！！

えっ？なんか聞いたこと有るけどって？「汗ダラダラ」さ、さあなんだったつけ「目を逸らす」。

・・・・・・スイマセン、ちょっとパクリましたハイ、名前とか一緒です。

で、でもですね、大きさはISと同じですよ、ハイ、スイマセン、言い訳しません、デザインとかめんどくさかったんです。

少しはISの機能使ってるんですよ、絶対防御とか生体機能の補助とか。

ま、まあ、そんな訳で能力が高い男の人結構いる、というより7割が男だ。

でも手配するとき「女性が戦闘要員としているんですか？」とか言われたよ、まっ、すぐに分かるさ。

さ〜て、どうしようかな〜。

もう篠ノ之束しのののたはねに会いに行こうかな。

そうしようか。

次回

天災と鬼才が会おう？

乞うご期待。

設定・・・では無く。第二話 宇宙の王子、天災に会う。前編（後書き）

感想待ってます。

第三話 宇宙の王子、天災に会う。 中編

————— 神龍侍目線 —————

タッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタ

「へつくしゅん」

あつやっべ!!!

「……… 静かに、閃夜」

ごめんなさいという意味で手を振る俺。

何をやっているかというと、アヴァロンの城に潜入している。

なんで!?? と思った人、正解です! (何が!? by 作者) まあ、あれですよ、自分の能力の確認と後はドッキリだね、うん、あれだよ若気の至り。

まあ、俺の場合は地球に降りるためには、父さんの許可が必要なんだよな、めんどくさいんだよな。まあ、許可なんて有って無きが如し、お父さんなんか「ん」地球行くのか「行つてらっしゃい」だからね。

ん? 何がいけないのかって? まあ俺、王子だからね、地球行くのは危険なんだよな、ほら誘拐とかさ。

お父さんの言い分としては、

「こいつに勝てる奴此处にいないし、護衛とかお荷物だろ」

正論だけどね、もう少し心配してくれてもいいじゃん

「いや、お前俺より強いし、中学卒業したら継げよ」

いいのか？それでいいのか？国王！！？あんだ“仁君”じゃないの！！？

「それでもだ、お前のほうが上だ、プライドなんてどぶに捨てるぐらいの器量はあるさ。てゆうか、国王めんどい、お前に押し付けられるばいいだろ」

ちよつと！！オイ！！あんだ何言つてんだ！！まずいだろ！！国王！！！！

「・・・馬鹿野郎、「パアアン！！！」閃夜君が継いでも、お前が補佐すんだよ」

おお！零夜のお父さん！！となればあの音はあの伝説の

「oooooooooooo！！陣夜！！書類アタックは酷いぞ！！！」

説明しよう！書類アタックとは文字どうり！書類による攻撃だ！！しかしこの真骨頂はその書類の量により威力が変わることだ！！！！つまりサバればサバるほど強くなる攻撃！！！！これの起源は仕事をサボる国王に厭きた宰相が戒めるために創めてたとしてある。

「・・・聖夜、馬鹿なこと言うお前が悪い」

「ん！！！？なんで会話になってんの！！！？」

そう言うと思っていた声が響く。

「バレバレだ馬鹿、地球に行くんだろ？行つて来い」

おお！！流石！！！！馬鹿なことさえ言わなきゃかつこいい！！！！

「もう威厳とかないな俺・・・・・・・・」

おっ！落ち込んだ。

「・・・・・・・・自業自得だ馬鹿。零夜、居るんだろ」

何で分かったのかね。

「・・・・・・・・うん」

「ちゃんと補佐しろよ！次期宰相！！」

うわぁ！ビックリした！！

「はい！！」

うん！うん！いいね！これぞ親子だよ。

「閃夜、俺らもやる？」

「やめて！恥ずかしい！あれの二番煎じとか、かつこ悪い！！」
そう思うよね！あの感動の場面を真似するとか。

「だよね、やつぱり。じゃあ俺ら流にいくか。」
ん？なんだ？

「適当にやれ！そして無駄なことはすんな！んでもってちゃんと帰つて来い！！できれば彼女連れて来い！！以上！！！！」
ふっ、ならば俺も合わせるか。

「了解！！！そして最後は無理！！行つて来る！！！」
決まったかな？

――――地球へ――――

「来ました地球！！」
んんんテンション上ツツがるん。

「・・・・・・サツサと行こう」
ん？ああ、分かったよ、りょーかい、零夜。
「じゃあ行こうか、零夜」

天災と未来の最強の所に・・・・・・ね。

次回

ようやく邂逅する二人。
どんな会話に??
前振り長すぎ！と作者も思ってる！！
そんな訳で次回終盤に入ります！

乞_レつご期待。

第三話 宇宙の王子、天災に会う。 中編（後書き）

読んでくださっている方、ホントにありがとうございます!!

第四話 宇宙の王子、天災に会う。後編（前書き）

やっと、原作キャラ登場！！！！

初めに会うのは意外なあの人！？

どうぞ！！！！

第四話 宇宙の王子、天災に会う。 後編

―――神龍侍目線―――

あのさ……

何この状況……

（何が起こってんだよ！知ってるけど！by作者）

書けよ！！！！！！

ん？何が？？

何が起こってんだよって言うと、男の子と女の子が複数の男の子に
囲まれてリンチされてる。

しかもあれは、“織村一夏”と“篠ノ之箒”だな。

あゝ、あいつら今、小学3年か。

ん？そっだよ、あいつら年下。

まあ、学園では同じ学年に（無理やり）入るから問題ない。

……よし。

盗み聞きをしよう。

え〜と……

困んでいる男の子『お前らこの頃生意気なんだよ！！』

困んでいる一同『そっだ！そっだ！！』

織斑一夏『何がだよ！！』

困んでいる男の子『お前ら、去年3人倒したからって、調子乗ってんじゃねーよ！！』

困んでいる一同『調子に乗るな！！』

織斑一夏『どこが調子乗ってるんだよ！！！』

困んでいる男の子『篠ノ之とかだよ！！！』

織斑一夏『何だよ！！！！』

困んでいる男の子『オシャレしてんだろ！？男女の癖に！！！』

織斑一夏『テメエ！！！』

掴み掛かる織斑。

困んでいる一同『それが調子乗ってるって言うんだよ！！！！』
突き飛ばされる織斑。

篠ノ之箒『一夏！！』

織斑に駆け寄る篠ノ之。

困んでいる一同『へっ！！弱えー』

篠ノ之箒『貴様ら！！！』

殴りかかる篠ノ之。

．．．．．そう言えば、この辺りの監視カメラがあそこを撮ってるな。

．．．．．篠ノ之束．．．．．か。

困んでいる一同『けっ！！』

突き飛ばされる。

織斑一夏『箒！！！』

今度は、織斑が篠ノ之に駆け寄る。

困んでいる一同『やっぱり、こいつら付き合ってるんだ〜!!!!』

・・・・・・この気配は、織斑千冬か。

・・・・・・もうそろそろ行くか。

織斑一夏『お・・前・・らあああああ!!!!!』

俺は織斑一夏の肩に手を掛ける。

「はいはい、落ち着け」
そのまま引つ張る。

「えっ???」

よろける織斑一夏、それを軽く支える。

「さ〜てと！餓鬼共!!」
俺は男の子たちを見回す。

「調子乗ってんのはお前らだ・・・・」
その後睨み付け、声のトーンを下げ、さらに全力の100分の1の殺気をぶつける。

非難100パーセントな声をぶつける。

「……………で、出て来て下さいよ“織斑千冬”さん」

無視ですか、

無視ですね、

無視なんですね？

虫ですか？

いいえ違います、

無視です、

無視なんです、

無視という非道な手段です、

無視ですか？

無視ですよ。

「何時から気がついていた？」

質問には答える。

「生まれたときから……………ではなく、（あながち嘘でもない）初めからですよ、その天災さん含めて……………ね」

俺は監視カメラを指差し、答える。

「どうでもいいから！遊びに来てよお兄さん！！さっきカッコよかったよ！！」

おお、一夏君！君は分かってくれるんだね！！

「……………どうすんの？？」

いや、招待されたら答えは一つ。

「行きましょう」

次回

今度こそ天災さんと邂逅。

これ終わったら、設定書こつ。

乞うご期待。

第四話 宇宙の王子、天災に会う。 後編（後書き）

束サンと会えないなー。

原因は、ひとえに俺の文章力の低さ。

読んでくださっている方スイマセン。

第五話 大鬼才、世界を開く・・・・・・・・前のお話（前書き）

これが終わると、原作へ飛びます。

「……駄目だ、千冬さん。今出たら、悪いほうにしかいかない」

ドン！……ドゥン！！……ガァン！！！

「夏ア！！」

ダッダッダッダッダッ ガァン！……ドサ……

「箒ちゃん！！」

ダッ ガシ！グググググググ

「アンタが行ってどうなる！！東さん！！」

ジタバタジタバタジタバタジタバタジタバタジタバタ

「離して！！せん君！！」

ジタバタジタバタ ギュッ……

「頼むよ、あんたまで失いたくはない」

ガアン!!!!!!!!!!ダアン!!!!!!!!!!

「・・・・・・・・・・ちっ、数が多い。やり過ぎだよ束さん」

ギュー!タッタッタッタッ

「ホントだよ!まったく!」

かああ////////.....ボン!

「ごめん////////せっかく仲良くなったからと思って////////」

ドダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

「オイ!束!!!!うらやましい!.....じゃなくて!!!!早く敵を倒せ!!!!」

そりゃあ束さん&神火鳥、特製の新感覚体験型ガンゲームだけど??

本体の中に入って、生身で体験できるけど??

感触とか反動とか同じだけど??

何か??

何が起きていたか簡単に説明すると・・・・・・・・

1、一夏が囲まれる

2、千冬さんが突撃しそうになる

3、神火鳥が止める

4、箒、行っきまーす

5、返り討ち

6、ウサギが暴走しかける

7、俺が抱き止める

8、ぎゃー、狙われたー

9、抱きかかえたままで、逃げる。

10、めんどくさいので、ミサイル乱射!!

11、やったー

こんな感じ。

この前来た時、ちょっとあつて、東さんに気に入られた。

そんなこんなで、色々やってたら、東さんと千冬さんを落とすしちゃった

いやー。

やつちやつた。

【まあ、俺がやらせたんだがな「作者」】

「そう言うわけで、俺と神火鳥は明日帰る」

どんな訳だよー、てな。

「ええええええええええええええええ」

うるせーな！。

まあでも帰らないといけないんだ、色々と用意しないといけないしな。

「……まあ、二度と会えないわけじゃないんだし」

「そうだ、また会えるさ！」

「そうだよな！また会えるよな！！」

一夏、そんなに悲しそうな顔すんなよ、なんだか、帰りたくなくなるだろ。

もっと笑え。

「また会えますよね？」

だからそんな顔すんなや、箒、また会えるって。
絶対な。

「絶対だぞ」

了ー解、千冬さん。

次は、意外なところで出会うと思うよ。

「絶対だからね！せん君！」

「ああ！！じゃあな！！」

「バイバイ」

そして………世界は震撼する。

生み出されるIS。

起こる白騎士事件。

最強の兵器。

今までを完全に破壊する兵器。

始まる女尊男碑。

そして世界はまたも震撼する。

その常識が崩れることに。

最強を超える者があることに。

それは。

アヴァロンの王子が率いる最強の部隊。

何者も逆らえぬ部隊。

ISを取り締まる部隊。

その名は

その名は

その名は

その名は

その名は

・

その名は

.

“ IS風紀委員会 ”

さあ！！世界はどう動く！！！！

次回

彼らが、IS学園に！

乞うご期待！！！！

第五話 大鬼才、世界を開く……前のお話（後書き）

スイマセン手抜きです。

設定（前書き）

遅くなりました設定です。

原作に入る前に書こうと思っていたので、今書きます。

それではどうぞ。

設定

原作開始時プロフィール

氏名：神龍侍閃夜^{じんりゅうし せんや}

年齢：17歳

職業：転生者・主人公・アヴァロン国王・アヴァロンホーム社長・アヴァロン国家代表・IS学園1年1組

容姿：髪の毛と目の色は黒、髪は肩にかかるぐらいで少し撥ねている。

性格：基本的な行動原理は面白そうか、そうでないか。

別段アヴァロンの事で威張ったりはしない。

理不尽な事などはあまり好きじゃない。

人を馬鹿にしたり、侮辱されると怒る。

神火鳥のことを親友だと思っており、信頼している。

備考：神により転生させられた転生者。

転生前から身体能力は高いほうである。

怒ると基本的に手が付けられなくなる。

父親の事を馬鹿親父等と読んでいるが、かなり信頼し、尊敬している。

専用機：モビルスーツとインフィニット・ストラトスMSを所持している。I S

専用IS：クライム・セイヴァー罪の救世主

動力炉：時空間連結炉・超小型レーザー核融合炉×2

メインシステム：カウントレス・ノウレッジ無数の知識

近距離武装：パニッシュメント・ブレイド罰の刃

備考：日本刀の形をしている。

峰の部分がスライドしてエネルギーが放出される。

剣の刀身はエネルギーで補助してあるので、何でも切れる。

相手に当たると、絶対防御が発動して、シ

ールドエネルギーがどんどん削れる。

ブライトネス・ケイオス輝きの混沌

備考：日本刀の形をしている。

紅椿の二本の刀の能力を合わせた剣。
二本ある。

エネルギーを最大放出すると、巨大な剣の

形になる。

遠距離武器：ヘレティック・ブレット^{異端者の弾丸}

備考：ビームライフル。

^{偏向射撃}フレキシブルが可能。

収束形態と拡散形態、連射形態と単発形態

の4種類がある。

連射形態の収束形態だと、一秒間に5発。

連射形態の拡散形態だと、一秒間に300

発。

単発形態の収束形態だと、一秒間に1発。

単発形態の拡散形態だと、一秒間に60発。

単発形態は収束形態の1/4倍の威力。

2本ある。

滅び^{の咆哮}フオール・ロアー

備考：超圧縮反物質砲

次元連結炉により取り出した反物質を圧縮

して打ち出す。

当たった物質を対消滅させる、最終兵器。

軽々しくは使えない、まさに“滅びの咆哮

”

その他：イコライザ^{後付武装}

特殊武装：デイスパー・メテオ^{絶望の隕石}

備考：6枚の翼の形をしている。

その羽一枚一枚からビームが発射される。
偏向射撃
フレキシブルが可能。

泣きたくなくなる位に鬼畜な攻撃。

一つの翼から、一秒間に約1000発ぐら

い。

一秒間に、計約6000発撃てる。

1発でシールドエネルギーが10分の1削

れる。

単一
ワンオフ・アビリティー：ミソロジー・セイヴアー
能力
神話
の救世主

備考：すべての性能と武器の威力が最大50倍になる。

相手の特殊武装と単一能力の効果を一切受け付け

なくなる。

枚の羽。

外見：スマートな外見、目立つのは後ろに付いている6

そして、羽から出る余剰エネルギーの粒子。

バイザーを出す事ができる。

黒と白でカラーリングされている。

黒と白の割合は4対1

備考：超広域全距離単機完全制圧をコンセプトに作られ

た機体。

他の追従を許さぬ、まさに無敵の機体。

その代わりに機体の操縦は難しい。

考が必要。

機体の全性能を出すためには、最低8個の分裂思

メインコンピューターのカウントレス・ノウレツ
ジは基本的に3秒あれば

相手コンピューターの完全制圧が可能。

さらに管理人格が存在し会話やある程度の操縦が
できる。

管理人格の名前は女性で“ユリエス”。

管理人格は実体化ができる。

専用MS：？？？？？ 現在公開不能

氏名：神火鳥零夜^{しんかどり れいや}

年齢：17歳

職業：準主人公・転生者・アヴァロン宰相・アヴァロンホーム副社長・アヴァロン国家副代表・IS学園1年1組

容姿：髪と目が黒、髪の毛は肩に掛かるぐらい、目は少し細め。

性格：基本的に温和、もしくは興味がないとも言える。

怒ると親友の神龍侍にしか手が出せない。

怒る原因は基本的に友達を侮辱される事。

見える範囲は助けて上げたくなる事もある。

神龍侍の事を唯一無二の親友だと思っている。

備考：神により転生させられた転生者。

転生前から身体能力は高いほう。

父親のすべてを尊敬している。

基本的に声は小さいが、聞こえないわけではない。

専用機：モビルスーツ^{MS}とインフィニット・ストラトス^{IS}を所持している。

専用IS：破壊デストラクション・黙示録アポカリプス

動力炉：時空間連結炉・超小型レーザー核融合炉×2

メインシステム：無数カウントレス・知識ノウレッジ

近距離武装：真夜中ミッドナイト・燕スワロウ

備考：日本刀の形をしている。

紅椿の二本の刀の能力を合わせた剣。

二本ある。

当たると絶対防御が必ず発動し、エネルギーがど

んどん削れる。

遠距離武装：狂気マッドネス・喜びジョイ

備考：遠距離用ビームライフル。

まともに当たるとエネルギーが半分ほど削れる。

二本ある。

基本的に脇に抱えて撃つ。

忘却オブリヴィオン・魔王サタン

備考：中距離用ビームライフル。

二本ある。

常に拡散状態であり、一秒間に400発

滅びフォール・咆哮ロアー

備考：クライム・セイヴァーのものと同じ。

その他：後付武装イコライザ

特殊武装：クリムゾン・コメット^{真紅の彗星}

備考：六枚の翼の形をしている。

一枚の羽から3発のエネルギーを放出する。

1発撃つのに1、8782秒かかる。

つまり1、8782秒で18発撃てることになる。

1発で約100体のISのシールドエネルギーが

0になる。

泣きたくなる位鬼畜な武装。

ワンオフ・アビリティー^{単一能力}：ミソロジー^{神話}・セイヴァー^{の救世主}

備考：クライム・セイヴァーのものと同じ。

外見：クライム・セイヴァーと色が逆転しただけの外見。
バイザーを出す事ができる。

備考：コンセプトも機体性能もクライム・セイヴァーと

同じ。

クライム・セイヴァーの兄弟機。

カウントレス・ノウレツジの管理人格の名前は“

クライム・セイヴァーの事を“お姉ちゃん”と呼

んでいる。

クライム・セイヴァーには“カリちゃん”と呼ば

れている。

クライムセイヴァーと同じ女性型、実体化が可能。

設定（後書き）

どうでしょうか？質問あれば、感想下さい。

第六話 クラスメイトは全員女じゃ無かった。(前書き)

原作へGOです。

第六話 クラスメイトは全員女じゃ無かった。

――――織斑一夏視点――――

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」
ショボトルーム

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生やまだまや（さつき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだばつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

そういえば、子供だったはずなのに大人よりカッコ良かった人が居たなー。

会いにこなくて千冬ねえが怒ってたっけな。
いつか会えるって言ってたっけな、全然来なかったな。
本当に何時か会えるかなー、分かんないな。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

でも、結構遠い所から来ているらしいから、また会えるかなー、分かんないなー。

いかんいかん、俺が聞いてないせいか、ちょっとうるたえる副担任
がかわいそうなので、せめて俺だけは返事しておこうと思わなくも
無いのだけど、そんな余裕はない。
いや、考え事している時点で余裕あるのか？知らないよ。

それは！！なぜか！！??

まあ皆さん分かっているんだろう。

俺以外のクラスメイトが全員女だからだ

あ！でも遅れている奴がいるらしい、担任と同じく。
担任は女らしい、来てないけど。

しかも、真ん中&最前列だなんて、自然に見ても誰も気が付かないから否が応でも注目を浴びるじゃないか。
まあでも、皆見てれば別に大丈夫だという、『赤信号、皆でわたれば、怖くない』なんて思うんだろうな。

全員の視線が集まってると思ったら一人だけ見てない、いや、見たら顔を背けたと言った方がいいかな。
幼馴染の篠ノ之箒だ。
俺って嫌われてるんじゃないか？箒に。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「はい！？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が疑問系になってしまった。
案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分にならなくもない。

しかし何なんだろうな、試験会場を間違えてISを動かしてしまい、此処に来た。

でも世界で一番目ではないらしい、もう二人居るらしいんだが、来てないのか来ないのか分かんないね。

そう考えていると、山田先生がいきなり謝ってきた。

「いや、あのそんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。

……じゃあやるか、そう思い後ろを振り向くと今まで現実逃避していた分少したじろぐ。

しかし、やらなきゃな、ここで溝を作りたくない。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく」

ドオオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

「オイ！！！！手をあげろ！！！！ISは使うなあ！！！！外に居る担任も手を出すな！！！！この男がどうなっても良いのかああ！！！！ええ！！！！！！！！！！」

銃を持った男が3人乱入、つてえ！？え！？え！？え！？え！？

「くっ！！」

あ！千冬姉え！！っっていうか、えっつ！！！！俺が人質？

「千冬姉！！！！俺に構わず」

「うるせえ！！！！餓鬼！！！！大人しくしてろお！！！！」

「おいおい、五月蠅いのはてめえらだよ、ハエ」

「・・・・・・・・ハエは大人しく地べたを這つてろ」

「いや、ハエだからこそ地べたを這わないだろ」

何かが廊下に居るみたいだ。

「誰だあ！！！」

「「唯の無敵だ」」

そう聞こえるなり、二つの影が飛び込んで来た。

「動くなと」

男が銃を構えて

「ハイ、無駄〜」

「・・・・・・・・無駄だね」

ガキン!!

銃を一人が奪い取り後ろに下がる。

「っな!」

「よっ、と!」

もう一人が男を殴る、スッゴイ早く。

バキ!!ドゴオオオン!!!!!!

あれ?音がすごい事に。

「アニキ!」

あっまだ他の

「「よっ!!」」

ガキッ!!!!ドドオオオン!!!!!!

「ア……………ア……………ア……………」

全員がやられた、スツゲエ。

「大丈夫が一夏」

えっ？

「……………怪我はない？」

なんで

「ふ、俺を忘れたのか？一夏」

「……………そんな事ないと思うけどね」

ま、まさか

「神龍侍、神火鳥、もうそろそろ戻れ。」

そんな

「皆席に着け!!」

千冬姉の号令で席に戻るクラスの皆。

席に当たらないように、倒していたため全員が席に着いた。

「自己紹介をしてくれ」

今はそんな事より

「神龍侍閃夜です」

「……神火鳥零夜です」

「皆さん」

「……皆」

「仲良くしてね」

望んでいた再開は突然の形で果たされた。

次回

そんなこんなでIS学園に入学。
どうなる？どうなる？

乞うご期待。

第六話 クラスメイトは全員女じゃ無かった。(後書き)

急ぎすぎたかな？

ああ、気にしないで。当たり前的事だから。

――神龍侍視点――

「仲良くしてね」

いや、こんな事が起きたのに自己紹介っておかしいだろ。
だが、ここはあえてもつと喋る。

「よし。じゃあ席に

」

織斑先生が言おうとするが。

「皆さんどうも！さっき名前だけは言いましたが、神龍侍閃夜です
！」

「こんな事があって驚いてると思うけど、大丈夫！！」

「僕たち『IS風紀委員会』が連行するからね！」

「さあ、黒服の皆さんカモン！！」

そう言つと黒服を着た女性が入ってきた。

「委員長”こいつ等はどうされますか?”」

あゝあ。

言つちやだめじゃん、後で言おうと思つてたのに。

「じゃあ適当に罪を付といて。ちなみに『適当』は『ちよつど良い』と言ふ意味だぜ」

「はい」

「じゃあ、ばいばい」

女性たちは歸つていく。

「じゃあ、席に」

またまた、織斑先生が言おうとするが。

「皆さん気が付いちゃいました?気が付いてないわけですね?」

少しためて。

「改めて自己紹介！“宇宙大国アヴァロン国王”兼“アヴァロンホームの社長”兼“アヴァロン国家代表”兼“織斑千冬&篠ノ之束の恋人”の『みんなの優しいお兄さん』！！」

「神龍侍閃夜で〜す！！」

そう言った後に半歩下がると、零夜が半歩出てきた。

「……………それじゃあ自己紹介」

「……………“宇宙大国アヴァロン宰相”兼“アヴァロンホーム副社長”兼“アヴァロン国家副代表”の『声が小さいのはほつといってください』」

「神火鳥零夜です」

皆ビックリしている。

すると、織斑先生から。

あれ？赤くなってる。

すぐ言い返すかと思ってるのに。

て、あれ？

零夜は？

「……………混乱させるな、馬鹿野郎！！」

ちよっ

次回

とんでもないスタートで始まりました。

さてどうなるのか？

乞うご期待！

友達百人できるかな？

意外とできた。

――――織斑一夏視点――――

「ズドオオオオオオオオオオオオオオオ」

え？

「この馬鹿野郎が！！混乱させてどうするんだよ！！悪乗りした俺も馬鹿だが、お前のは調子乗りすぎだ！！！」

何時もおとなしそうな零夜が、まるで鬼のように声を荒げて叫ぶ。
恐ろしい。

「謝罪しろ！！今すぐに！！」

しかし閃夜は先ほどの一撃で完全に気絶してる。

それが分かったのか零夜は閃夜を床に置いて、千冬ね
なかった織斑先生のほうを向いた。

じゃ

「申し訳ございませんでした。この馬鹿には後で厳しく、厳しく、厳しく言いつけておきますので」

厳しくの所を三回言っただぞ、三回も。

「あ、ああ」

見ろよ織斑先生や他のクラスメイトもたじろいでるぜ。

「・・・・・・・・・・さ、行くぞ馬鹿」

何時もの声にはなったが閃夜の扱いが酷い。

なんていったって足を持って引きずってるからな。

「・・・・・・・・・・勝手に立ち上がれ」

そう言うつと零夜は閃夜を席の近くに持って行くと、床に置いたまま席に着いた。

ちなみに席の順番は、俺が真ん中でその隣が箒、その隣が閃夜、その隣が零夜になっている。

その後とりあえず前を見ると

「え・・・・・・・・えつとお・・・・・・・・ふえ」

今にも泣き出しそうな山田先生が居た。

「えと・・・・・・・・あの・・・・・・・・大丈夫ですか？」

閃夜を心配しているようだ。

「えと・・・・・・・・あのー・・・・・・・・」

ますます泣きそうになる。

あ、そうか。

一応閃夜達は国王だもんな。

緊張してんのか。

「・・・・・・・・大丈夫です、山田先生。そのうち、いや後一分ぐらいで生き返りますから」

「・・・・・・・・後、皆さんに言いたい事があります。僕達を“王”

ではなく“同級生”として見て下さい。少しずつで良いです、仲良く気軽に話し合える仲になりましょう」

そう零夜が言うと一人の女子生徒が言った。

「で、でも。不敬罪とかで罰せられたり、言う事を聞かなきゃいけなかったりするんですよ？だったら恐れ多くて」

そう言った。

その瞬間、零夜は『ああ、やっぱりか』と言う顔をしていた。

ちなみにさっきの女子の言葉だが、俺はそんな事ないと思う。

それなら俺は死刑にされてると思うから。

その女子の言葉に零夜が反論をしようと口を開いた瞬間

「『王とは独裁者ではない。民からの信頼に答え、民を守り、その見返りに働いてもらう。王とは何でも好きなようにできる者ではない。もし好きなように好きなだけ好きな事をする王が居るならば、そのような王の事を人は“愚王”と呼ぶ』俺は此処に“友達”を作りに来たんだ、恐怖政治をしに来たわけじゃない」

ゆっくりと閃夜が起きながら語る。

さながら演説だな。

「ところでみんなにお願いがある。俺らと

「

そこで閃夜は間をおいて

「友達になつてくれないか？」

そう笑顔で言ってきた。

周りを見ると、みんな顔を見合っている。

やっぱりみんな戸惑っているようだった。

しかしその後みんな前を向いた

いや

閃夜のほうを向いた。

そして

喜んで

と、言った。

次回

彼らにあの人が接近……

乞^うづご期待！！

友達百人できるかな？

意外とできた。（後書き）

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230w/>

IS～インフィニット・ストラトス～“最強”の機関‘IS風紀委員会’

2011年11月17日17時40分発行